

聴覚障害幼児のやりとりする力を育てるための取り組み

～幼稚部入学当初の実践～

土手 信・池田 智帆・杉本 真美

聴覚に障害のある子どもの気持ちや言葉を育むには、身近な人との関わりの中で丁寧にやりとりをしていくことが望まれる。3歳児期は、その基礎を育てる重要な時期となる。入学当初は、新しい環境や生活に対して子どもが戸惑ったり不安に思ったりすることがあるが、今年度入学した子どもたちにも同様の姿が見られた。教師は、子どもの気持ちの動きを丁寧に汲み肯定的な言葉をかけること、子どもが安心して楽しく過ごせる環境を整えることなどに配慮して関わってきた。次第に子どもたちの笑顔が増え落ち着いて生活できるようになってきた。楽しく見通しをもって過ごせると、子どもは積極的に気持ちを表し、人との関わりを喜ぶ気持ちもふくらみ、それがやりとりする力の育ちにつながると考える。本稿では、今年度の入学当初の実践について報告する。

キー・ワード：幼稚部 やりとり 気持ち 保護者支援

1 はじめに

本校幼稚部では、日常的なやりとりや話し合い活動を大事に扱い、それらを通して人との関わり、コミュニケーション、物事の理解、気持ち、言葉などを育んでいる。

聴覚に障害のある子どもが、やりとりする力身につけていくためには、相手の話をわかろうとして聞いたり、相手にわかるように伝えたりする態度や力が必要となる。また、話し合い活動が成立するためには、活動に自ら参加しようしたり、教師や友達と一緒に活動を楽しんだりすることが望まれる。

3歳児期は、こうしたやりとりする力の基礎を育てる重要な時期となる。しかし、入学当初は、新しい環境や生活に対して子どもが戸惑ったり不安に思ったりすることがある。生活の見通しがもてず自分のしたいことと違うと焦れたり、初めて経験することに不安を感じすぐに取り組むのが難しかったりする場面もある。この時期は、子どもたちが幼稚部生活に慣れ、安心して過ごしたり教師や友達と一緒に活動を楽しんだりしながら、身近な人との関わりが楽しめるよう、教師が配慮しながら進めていくことが求められる。

今年度、3歳児担当教員3名で、日常生活での教

師と子どものやりとりや学級での活動の場面の中でどのような取り組みを行っているか、どのようなことに配慮して子どもと関わっているか、どのようなことに留意して保護者への支援を行っているかといったことについて、実際に取り組みながら検討してきたことをまとめ、幼稚部入学当初における支援のあり方について考察をする。

2 遊びや生活の中での取り組み

やりとりする力の土台として、「相手に気持ちを伝えたい」「相手の気持ちをわかりたい」という意欲を育てることが重要であると考え、子どもたちと関わってきた。

(1) 風船遊びでのやりとり (5月)

学級で風船で遊んでいるとき、割れてしまった風船を空気入れで直そうとする子どもがいた。「できないよ」「新しいのをあげるよ」とすぐに大人の感覚や解決方法を伝えるのではなく、割れた風船に空気を入れようとするとうなるのか、教師も一緒にやってみた。風船は元通りにはならなかったが、ふくらんだりしぼんだりする様子を、学級全員で見て楽しんだ (Fig. 1)。

このように様々な場面で子どもの発想を大切に、他の子どもと共有して全員で楽しむということを意図的に行ってきた。そうすることで、子どもが気持ちを積極的に表したり、他の子の表したことに興味をもったりするようになってきた。また、子どもが教師の話をよく聞こうとするようになってきた。

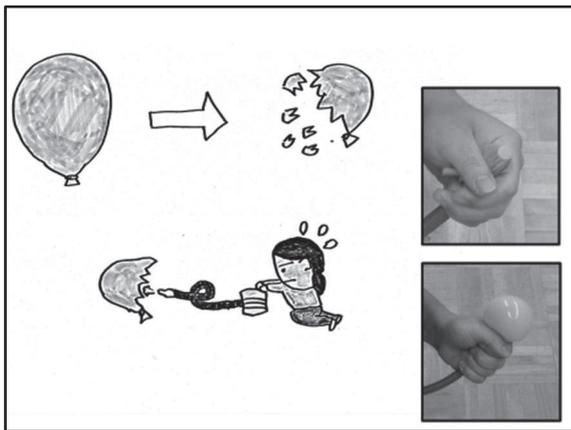


Fig. 1 風船遊びの様子

(2) 水筒を配るときにのやりとり (6月)

水筒を配るのが好きな子ども A 児が、友達 B 児の母親に水筒を渡そうとすると、B 児が「ダメ！」と言い、泣いて嫌がった。A 児も怒り始めた。教師は、「どちらが悪い」「じゃあこうしよう」と急いで解決を図るのではなく、それぞれの子どもの気持ちを汲み、「A くんは渡したいよね」「B ちゃんは嫌なんだ」など、一緒に言葉や身振りで表していった。やがて B 児が動き、A 児の母親の水筒を持って来て A 児に差し出し、それぞれ自分の母親に渡そうという提案を、本人なりの言葉や身振りで伝えようとした。A 児はその水筒を受け取り、持っていた水筒を B 児に渡した (Fig. 2)。

このように、子どもが泣いたり子ども同士で主張し合ったりしたときに、解決を急がず、教師が子どもの気持ちを丁寧に汲み、一緒に言ってあげながら、子どもが気持ちを表したり、子ども同士で伝え合ったりするのを手伝うようになってきた。そうすることで、子どもが安心した様子で生活するようになり、思い通りにならないときにも、気持ちを切り替えるようになってきた。また、子ども同士でわかり合えることが自然に増えてきた。



Fig. 2 水分補給の様子

3 朝の活動や帰りの活動での取り組み

(1) 当番の活動

入学当初から、毎日の活動として名札配りやシール貼りを教師が進めてきた。徐々に子どもが見通しをもち始め、「次は名札だよ」と伝えてきたり、自分

でやりたがったりするようになってきたので、当番の活動として子どもが毎日交代で行うようにした。

このように、毎日繰り返される活動から、子どもが「わかった」と感じる経験を重ね、生活や活動の流れについて見通しをもつことで、自信をもって様々な活動に取り組めるようになってきた。

(2) 子どもの発想からの展開

前項で述べたように、朝の活動や帰りの活動は子どもに見通しをもたせるため、内容を決めて毎日繰り返し行っていた。ただし、決められた流れを滞りなく進めることを目的とはせず、活動の中で生まれた子どもの発想をその都度丁寧に取り上げることを心がけてきた。

ある日、帰りの活動でシール貼りの活動を行うため、「お便り帳（毎日シールを貼っている手帳）を持ってきて」と教師が指示したとき、持ってきたお便り帳を頭に乘せて喜んでいる子どもがいた。そこで教師も真似をしてお便り帳を頭に乘せてみた。すると、他の子どももお便り帳を頭に乘せた。そこから、お便り帳を頭から落とさないように歩く遊びになっていった (Fig. 3)。

このように、子どもの様子をよく見て子どもの発想から活動を広げていくことを、朝の活動や帰りの活動の中でも意図的に行ってきた。そうすることで、子どもが友達の様子や表現に興味をもち、自分の気持ちを伝えたり相手の気持ちに応じたりするようになってきた。



Fig. 3 帰りの活動で子どもと遊ぶ様子

4 保護者支援

(1) 保護者の気持ちに寄り添う

入学当初の保護者は、その後の学校生活や子どもの育ちに見通しがもてなかったり、生活に慣れるまで子どもの様子が落ち着かなかつたりすることから、不安を感じていることがある。また、逆に保護者が不安を感じていることでさらに子どもも落ち着かなくなるという循環も生じやすい。そこで、保護者の話をよく聞き、丁寧に応じるということを中心に心がけてきた。また、すぐ子どもの目について楽しめるような遊具を教室に設置するなど、子どもが楽しく過ごせるように配慮して環境の設定を行った (Fig. 4)。そうすることで保護者の気持ちがほぐれ、それが子どもにも伝わって子どもも楽しく落ち着いて生活できるようになるというよい循環が生まれた (Fig. 5)。

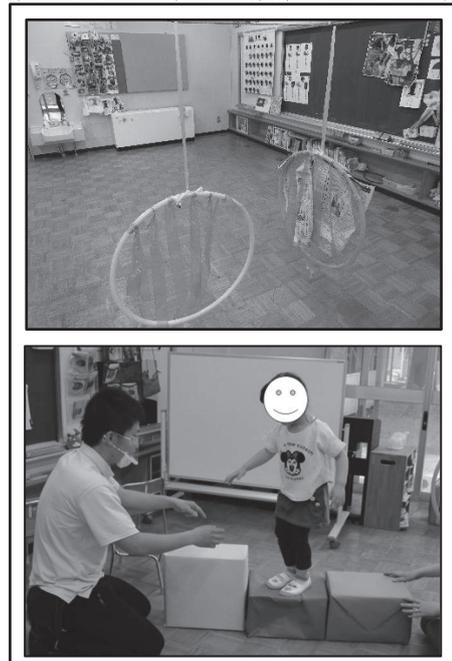


Fig. 4 実際に使った遊具

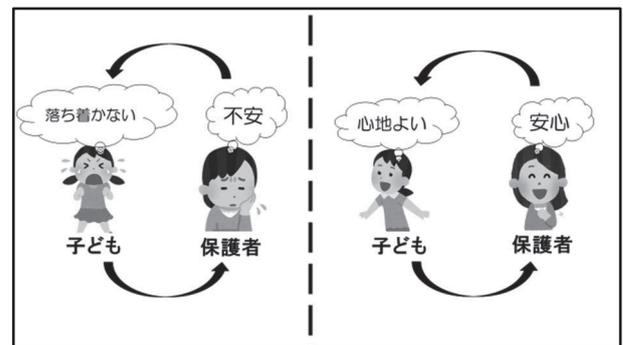


Fig. 5 母子間の相互作用による循環

(2) 保護者と一緒に考える

子どもの育ちをねらって行う活動の内容について、折に触れて保護者の思いも聞き取りながら、教師のねらいも説明し、一緒に考えるようにしてきた。

たとえば、毎朝行っている名札付けの活動について、保護者から「服が傷むのが気になる」という声が上がったことがあった。教師は保護者の思いを聞き取ったうえで、名札付けは単なるルーティーンではなく子どもの自立心ややりとりする力を育てるねらいのある活動であるということを説明した。そこでねらいがあるからといって保護者の思いを否定して活動を推し進めるのではなく、「どうするとよいでしょうね」と保護者に投げかけ、一緒に考える時間を設けた。すると保護者から、名札の安全ピンに小さいフェルト玉を通すことで服へのダメージを小さくできるという提案があった。実際にやってみると、フェルト玉があることで子どもが名札を自分で着けにくそうにしている様子がみられた。それは活動のねらいにそぐわないので、保護者もさらに考え、フェルト玉ではなくビーズを通して接着剤で固定するように改良していった (Fig. 6)。

このように、保護者からの意見や要望を頭ごなしに否定せず、教師のねらいを説明したうえで丁寧に話し合いながら活動を行うようにしてきた。そうすることで、教師と保護者の間に、思ったことを気兼ねなくお互いに言える信頼関係が築けてきた。

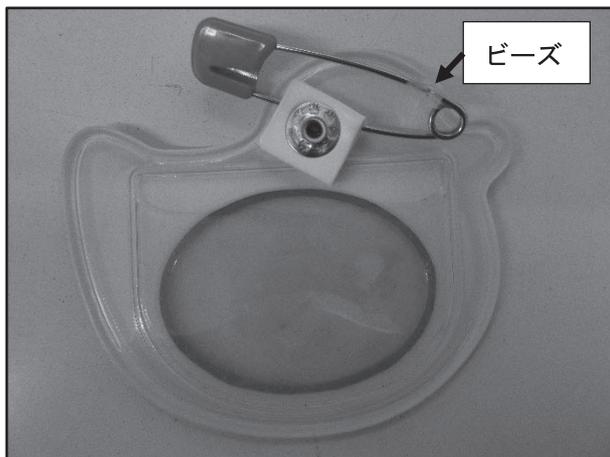


Fig. 6 実際に使った名札

5 まとめ

幼稚部入学から1学期の間、その時々の子どもの気持ちを汲んで肯定的に応じること、子どもがきちんとわかるように関わること、保護者が安心して子どもに関われるよう支援することに配慮してきた。こうした取り組みを通して、子どもが落ち着いて安心して過ごせるようになり、教師や友達と積極的に関わり楽しく活動に参加するようになってきた。今後のやりとりする力を育てていくための土台が作られてきたと感じている。

また、担当教員3名で日々の実践について話し合う中で、やりとりする力を育てていくためには、様々な要素があることが確認された。今後も、子どもの成長の様子とその時々に必要な要素を検討しながら、やりとりする力を確実に身につけていくための取り組みを続けていきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。